

長野県立歴史館たより

2018 年 **春**号 vol.94

特集

長野県の遺跡発掘 2018



小壺と内部から出た炭化した粟粒



漆塗りの縦櫛



磨製石庖丁



特殊な形の無頸壺



瓢箪形をした壺

県民により必要とされる歴史館になっていきます

長野県立歴史館長 笹本正治

私たちは職場として長野県立歴史館にいますので、歴史館があること、その役割について当然のことと思っています。しかしながら、とりわけ中・南信地方に住む人には歴史館に足を運ぶことはおろか、存在も知らない人が多くおります。私が館長になってから努力していることは、様々な機会を通じて歴史館を知ってもらうようにすることで、そのために毎日長野県立歴史館長のフェイスブックも更新しています。

長野県立歴史館の知名度は上がっていますが、多くの方は歴史館イコール展示場だというイメージのままです。歴史館の最も重要な役割は、長野県に関係する資料を集め、保管し、研究し、それを展示し、教育し、社会に影響力を持つ、の順番にあると思っています。

古文書でも絵画でも、すべての資料は時の経過とともに劣化します。未来の人びとが正しい歴史意識を持つためには、きちんと資料が伝わってい

ることが大事です。資料は今の時代のためにだけあるのではなく、時代を超えて未来の人たちも享受できるようにしなくてはなりません。本館に収蔵されている古文書や行政文書、考古学遺物などを少しでも良い状態で次の時代に伝えることが、本館の基層をなす使命です。本県に関わる資料を収集し、より多くの情報を未来に託したいものです。

今や各家庭でお蔵を持ち、大事な古文書などを家として伝えていくことは難しくなりました。県民にとって大事な資料をお預かりし、お蔵の役割をすることも、本館の大事な役割といえるでしょう。

多くの皆さんは歴史館の展示のみに目を向けるのですが、未来に責任を持って資料を預かる仕事、収蔵庫の大事さを、本年はこれまで以上に訴えていきたいと思っています。

同時にお出かけ歴史館や田淵行男展などを通じ、地域との関係を強化し、県民に必要とされる館になっていきます。



フィルム保管庫

書庫入口の鉄製扉を開錠し前室に入ると、3室（古文書書庫・行政文書書庫・フィルム保管庫）があります。各室に入るには、鉄製第2扉を開錠しなければなりません。ここへは、限られた職員のみ入室が許され、管理されています。



公文書・古文書等の燻蒸（害虫除去）



書庫入口の鉄製扉



行政文書書庫（10万点収蔵）



古文書書庫（22万点収蔵）

当館の「関係者以外立入禁止」ゾーンには、いくつもの収蔵庫が配置されています。平成29年度も県外流失文書を購入し、貴重な県内文書の寄贈を頂きました。また、県庁をはじめ、県の行政機関から歴史公文書が継続移管されています。これらは燻蒸処理後に整理し収蔵されます。

秋季企画展「進化する縄文土器～流れるもようと区画もよう～」を終えて

縄文人の感性と技術力の高さに触れる

縄文時代は1万年も同じ?～展示のねらい～

「1万年以上も続いた縄文時代」と聞くと、その間ずっと同じような暮らしをしていたと思うかもしれません。実際には、土器に限ってみても、次つぎと進化していました。まるで子どもたちの好きなゲームキャラクターが「進化する」ようにです。また、対象とした中期中葉土器の進化の方向性は、地域ごとに独創的な装飾を生み出すことでした。こうした点を知ってもらうことをタイトルに込めました。

異なった文化に関心を寄せることは、現在だけが対象ではありません。遠い過去の文化を「停滞していた」「関係ない」と一まとめで片付けず、分け隔てしない目でみて、優れた点を探り出し、採り入れることが大切です。例えば、縄文人の美的感性や、それを一個の土器に表現する構成力、製品に仕上げる技術力の高さを知っていただき、現代に活かすことも重要です。

見てもらうための仕掛け～展示と展示補助～

展示では土器を見ていただくことを主眼としたため、解説文を必要最低限に絞りました。さらに、興味を持って見ていただくため、写生会と人気投票を実施しました。写生は、気に入った土器を選

び、観察し、描くことで土器を覚えてもらう仕掛けです。会場では職員が声をかけて寄り添うようにしました。がんばって描き終わると、難しかった部分、顔（人面装飾）の特徴など、話したいことがたくさん出てきます。話すことでさらに理解が深まったものと思われます。逆に、主催者側も子どもたちの視点や発見から学ばせていただきました。

「S J D 91総選挙」（S：進化、J：縄文、D土器、91点）と銘打った人気投票は、縄文土器にそれほど関心がなかった人に、1点1点比べながら見てもらうための仕掛けです。出口に貼りだした順位速報とコメントを見ては、観覧者同士で話しがはずんだり、もう一度、土器を確認しに行く人もみられました。

企画展後も続きます～常設展示室～

華やかな土器の進化や地域性の顕在化は、排他的な社会では進みません。交流関係が盛んだったからこそ、互いの土器を比べ合い、オリジナル性の高い土器を作ろうとしたと考えられます。

交流をテーマとした常設展示室の展示は、3月まで続きます。ぜひ、お立ち寄りください。

（寺内隆夫）



縄文風リース作り（11月25日）

縄文人も使っていた蔓（つる）や、食べていたドングリを中心に飾りました



土器写生・ぬりえ優秀作品表彰式（11月26日）

土器の絵と歴史館の思い出が家庭に定着することを願っています

平成30年
巡回展

「長野県の遺跡発掘2018」

県立歴史館巡回展は、長野県埋蔵文化財センター及び県内の市町村教育委員会等が発掘・整理した遺跡のうち、話題となった資料を取り上げ、広く県民の皆様に公開する企画です。

話題となった遺跡の時代や性格にテーマを設け、過去に発掘された資料であっても、関連のあるものは取り上げて展示を行います。

今年度は、3つのテーマで展示を構成します。

テーマ
1

長野県埋蔵文化財センターの 発掘調査

平成29年度に発掘・整理された遺跡の中から、代表的なものを選んで展示します。



写真1 山鳥場遺跡の土器敷きのある石囲炉
(長野県埋蔵文化財センター所蔵・写真提供)

朝日村山鳥場遺跡

縄文時代中期の大きな集落跡です。今回の調査で注目すべきは、大きく立派な石囲炉をもつ堅穴住居跡が発見されたことです。昨年の調査では、なんと土器破片をびっしりと炉の中に敷き詰めた「土器敷炉」(写真1)をもつ住居跡が1軒見つかりました。

栄村ひんご遺跡

縄文時代中期から後期にかけての大きな集落跡

です。中期の敷石住居跡や本県では珍しい火焰型土器が多数出土しました。また、後期の注口形の土器なども発見されていますので、今回はそうした遺物を中心に展示します。

中野市柳沢遺跡

この遺跡は、東日本で初めて弥生時代の銅戈・銅鐸(重要文化財)がまとまって出土したことで知られています。その出土地点から北へ300m、南に150mと300mの3地点で調査が行われました。主な出土品(弥生土器)を展示します。

長野市小島・柳原遺跡群

平安時代の製作と推定される県内初の「塔鉢形合子」が出土したことで注目された遺跡です。昨年は善光寺の周辺で出土している古代の布目瓦が出土し、古代寺院との関係が話題になりました。奈良時代・平安時代の出土品を中心に展示します。

長野市長谷鶴前遺跡群

慶応3年～明治29年ごろまで、この地域に「長谷窯」があり、灯明具やカマドに関わる道具を焼いていました。今回、初めて「長谷焼」に関わる資料がまとまって出土したので、これを展示します。

テーマ
2

市町村教育委員会等の発掘 調査(長野県の弥生時代)

(1) 壺に貯蔵された栽培植物

弥生時代は、水稻栽培が本格的に開始された食糧生産の時代です。近年、米などを壺に貯蔵した発見例が増加していますので、主な資料を集め、お見せします。

長野市長野遺跡群 県町遺跡(後町小学校地点)

弥生時代中期の4号住居跡から出土した小壺の中から約3万粒もの炭化した粟が出土しました。粟以外にもヒエなどが含まれていました(写真2)。



写真2 長野遺跡群県町遺跡後町小学校地点
出土の小壺入り粟
(長野市教育委員会所蔵・写真提供)

長野市松原遺跡（高速道地点）

埋没した河川跡（SD102）から小壺入りのナデシコ科植物の炭化した種子が出土しました。土器内面におよそ350粒が付着した状態で発見されました。

佐久市岩村田遺跡群北一本柳遺跡

弥生時代後期のH56号住居跡から出土した壺の中から1,000粒をこえる炭化した米が出土しました。

(2) 石器使用の終わり、金属製品の登場

弥生時代は、石の道具から金属の道具に変わる時代です。長野市松原遺跡（高速道地点）で発掘された大陸系の弥生石器、佐久市西一里塚遺跡群の鉄剣・鉄鈷（腕輪）などを展示します。

(3) 黒曜石も壺に貯蔵される

長野県は、石器の材料となる黒曜石の一大産地です。石器使用の終わる弥生時代にも、全国的にも珍しい黒曜石を貯蔵した壺の発見例があります。千曲市峯謡坂遺跡、佐久市宮の上遺跡群根々井芝宮遺跡、箕輪町箕輪遺跡出土の壺と黒曜石を展示します。

※県立歴史館と伊那文化会館のみの展示となります。

(4) 時代の画期を示す弥生土器

太型蛤刃石斧や磨製石庖丁など弥生時代を代表する石器の終わりは、弥生時代の中期から後期にあたります。近年、この時期の資料が充実してきま

したので、千曲川流域の遺跡を中心に展示します。

長野市吉田高校グランド遺跡は、後期の初頭に位置づけられています。千曲川流域の後期初頭の標式土器は、この遺跡の名前をとり「吉田式土器」と命名されています。この「吉田式土器」に関連する資料を展示します。

佐久市森平遺跡と市枇杷坂遺跡群直路遺跡Iは、これまで好例の少なかった東信地域の弥生時代中期末～後期初頭の様子を示す遺跡です。長野吉田高校グランド遺跡出土資料と比較ご覧ください。また南信地域は、長野県北部とは違う土器が分布しています。「座光寺原式土器」と呼ばれており、飯田市の高松原遺跡出土資料を、市外では初めて展示します。



長野県立大学設立に伴う遺跡の発掘調査

平成30年4月、長野県立大学が開学します。大学設立に伴い対象地の遺跡が、長野県と長野市の埋蔵文化財センターにより発掘調査されました。まさに弥生時代中期から後期の変革期が中心の遺跡であり、その成果を展示します。

浅川扇状地遺跡群本村南沖遺跡（県立短期大学構内：弥生後期初頭、県埋蔵文化財センター調査）
長野遺跡群県町遺跡（後町小学校地点：弥生中期末、市埋蔵文化財センター調査）

会場と会期

- ①長野県立歴史館（北信会場）
3月17日（土）～6月3日（日）
- ②長野県伊那文化会館（南信会場）
7月13日（金）～8月2日（木）
- ③塩尻市立平出博物館（中信会場）
8月11日（土）～9月17日（月・祝日）
- ④浅間縄文ミュージアム（東信会場）
9月29日（土）～11月25日（日）

※巡回会場により、展示遺跡・資料等、変更する場合があります。

関連行事

長野県立歴史館会場

平成30年4月21日（土）

遺跡報告・パネルディスカッション

テーマ：「長野県北部の弥生文化を考える」

百済から伝えられたカマド構築材 — 円筒形土製品 —

1 はじめに

東国において決して多い事例ではありませんが、7世紀代の竪穴住居のカマド付近から円筒形をした土器（円筒形土器）が発見されます。この円筒形土器の名称を用いて、カマドとの係わりを最初に報告したのは岡田淳子氏です（文献1）。筆者はこの円筒形土器をさらに検討した結果、土器（うつわ）ではなくカマド構築に使用された部材であるとの確信を得たことから「円筒形土製品」の名称を提唱しました（文献2）。

2 長野県出土の飛鳥時代の円筒形土製品

7世紀前半を中心とする円筒形土製品が発見された遺跡は、長野市田中沖遺跡^{たなかおき}、同市屋地遺跡^{やち}、同市榎田遺跡^{えのきだ}（当館蔵・図1）、千曲市東條遺跡^{ひがしじょう}（当館蔵）、坂城町北浦遺跡^{きたうら}、同町宮上遺跡^{みやがみ}、松本市出川南遺跡^{でがわみなみ}です。

円筒形土製品の出土事例として、宮上遺跡H16号住居跡では、カマドの構築材として石と粘土が用いられ、さらに袖部の先端に芯材として円筒形土製品が用いられていました（図2）。

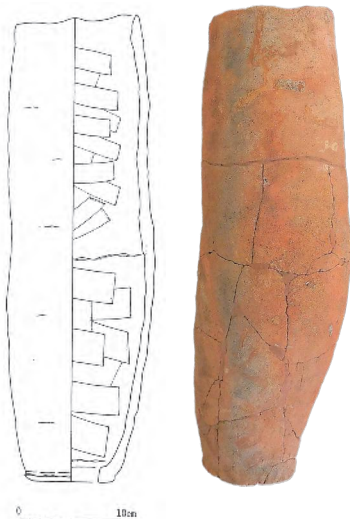


図1 榎田遺跡SB1401号住居跡出土円筒形土製品（文献3）

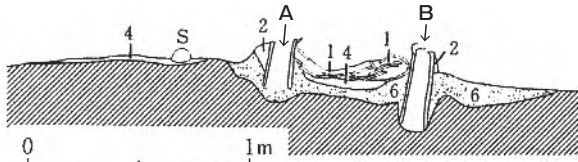


図2 宮上遺跡H16号住居跡カマド断面

左袖部（図2-A）では正位に円筒形土製品が用いられ、右袖部（図2-B）では逆位に用いられていました（文献4）。

3 円筒形土製品の出土からわかること

円筒形土製品のルーツは朝鮮半島、特に馬韓^{ばかん}—百済^{くだら}圏内です。日本では大阪府や滋賀県で多く発見されています。東国では山梨県東八代郡地域^{ひがしやつしろ}に集中がみられ、長野県では千曲川中流域を中心に出土しています。また新潟県・東京都・群馬県・栃木県でもその出土状況が確認されています。

円筒形土製品は限られたわずかな集落や竪穴住居からのみ出土する特徴を持っています。

円筒形土製品を用いてカマドを構築した人々は、ヤマト王権、特に推古朝の意図の中で新来文化を用いて従事した百済からの渡来人と考えられます。さらにヤマト王権の意図の中で新来文化などを東国に広めるために派遣され、派遣先のムラで構築したのが、円筒形土製品を用いたカマドであったと考えられます（文献5）。

以上のことから、長野県他で発見された円筒形土製品の分布を検討することにより、東国各地へ派遣され移動した渡来人たちの足跡をたどることができると考えられます。（西山克己）

参考文献

- 1 岡田淳子 他 「八王子市中田遺跡—古墳時代集落址の調査—」（資料編3）八王子市中田遺跡調査会 1968年
- 2 西山克己 「7世紀代に用いられた円筒形土器」『長野県考古学会誌』79 長野県考古学会 1996年
- 3 廣田和穂 他 『榎田遺跡』長野県埋蔵文化財センター 他 1999年
- 4 助川朋広 『宮上遺跡』II 坂城町教育委員会 1993年
- 5 西山克己 「7世紀前半を中心に科野で用いられた円筒形土製品」『シナノにおける古墳時代社会の発展から律令期への展望』雄山閣 2013年

明治改元150年「長野県誕生!」と新しい生活

当館では昨年の夏季企画展で、「長野県誕生! — 公文書・古文書から読みとく —」(以下「県誕生展」と称す)を開催しました。この企画展は、1867(慶応3)年11月9日(旧暦の10月14日)に大政奉還が行われて150年の節目の年に企画したものです。

新政府確立への道は明治維新と呼ばれ、1868年1月3日(旧暦の12月9日)の「王政復古の大号令」が近代日本の出発点とされます。今年は、明治改元150周年に当たり、県内外の博物館・文書館等でも、当館同様の企画展が催されます。

県誕生展では、新しい生活の解説に、参考資料として「開化因循興廃鏡」(明治初年・静岡県立中央図書館所蔵)を紹介しました。会期を終え、当館ではこれに類似する「新舊合戦」の図が発見されました。『キング新年号第七巻第一号』付録「明治大正昭和絵巻」(昭和6年1月1日刊行・松代藩士伊藤家文書)に所収されていたもので、明治～昭和初頭の出来事を、絵巻風に綴った

書物です。作者は細木原青起とあり、明治改元3年目にして欧米の文化が日本に次々と取り入れられ、これまでの生活形態が一変する様子を描きます。たとえば、中央に「合羽(カッパ)や傘はハイカラな鳶合羽(トンビ)や洋傘に圧倒される。」との解説入りで、その様子が描かれます。カッパはトンビに分が悪いことは一目瞭然です。欧米のものと戦いがはじまると、日本のものは次

つぎと劣勢に立たされたことがわかります。日本の生活や文化は、欧米式に代わろうとしている出来事を表したものでした。

明治3年についてはこのほかに、「国旗制定」と「種痘の施行」の難しさ、それに「平民に姓氏を許す」の図があります。江戸時代には、苗字を持つ身分は限られていたわけですが、明治3年9月19日(1870年10月3日)に平民苗字許可令が公布されたのです。「苗字を許されなかった一般平民に、苗字をつけてよいとお触れが出たのだから大喜び。が、さて何んにつけたものか一向見当がつかぬ。そこで多くは手習師匠とか檀那寺の和尚の許へ行ってたのんだものだ。顔が青いから青井とつけた、裏山に大きな石があるから大石とつけたなど珍話がある。」とは、清水対岳坊(現高森町出身・政治漫画家)筆によるものです。

本資料は刊行当時、社会の意識上にある明治・大正・昭和初めに話題となった出来事を取り上げた実に興味深い資料といえます。(伊藤友久)



「新舊合戦」 明治 大正 昭和絵巻『キング新年号』当館蔵

INFORMATION

インフォメーション

■2018(平成30)年 3月～6月の行事予定

詳しくは、ホームページ・広報チラシ等をご覧ください



3月

休館日
1～5
12・19
22・26

巡回展

「長野県の 遺跡発掘2018」

3/17(土)～6/3(日)

※内容は本紙3～4ページをご覧ください

■遺跡報告・パネルディスカッション

4/21(土) 13:30～15:00

テーマ：長野県北部の

弥生文化を考える

パネリスト：当館職員・成果報告者
成 果 1：須坂園芸高校内の遺跡
成 果 2：県町遺跡(後町小学校地点)
成 果 3：本村南沖遺跡(県短期大学構内)



礫床木棺墓と遺物出土状況
長野市塩崎遺跡群(弥生時代中期)
(長野県埋蔵文化財センター蔵)

講座・イベント

やさしい信濃の歴史講座

第7回(最終回) 3/10(土)

テーマ：信州を見据えて

「果てしなく黄色い花咲く丘で
—長野県民の満州体験—
(青木隆幸)」

親子映画会

3/20(火)・21(水・祝)・23(金)・24(土)

※いずれの日も13:00～15:00

4月

休館日
2・9
16・23

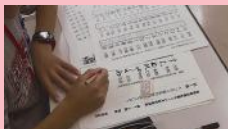
5月

休館日
7・14
21・28

6月

休館日
4・11
18・25

古文書学習熱 再燃!
解説できたら歴史への
視野が広がります



夏季企画展

君は河童を見たか!

6/16(土)～7/29(日)

■夏季企画展講演会

6/16(土) 13:30～15:00

講師 西山 克氏

(関西学院大学文学部教授)

ボクに
会いに
来てネ



銅罌子(どうがんず)
(長野市松代町大録寺蔵)

体験はどなた
でもご参加
頂けます



歴史館でこどもの日

5/5(土・祝) まが玉作り・プラ板制作 等

各講座等の日程

5/12(土) 考古学講座①

5/26(土) 県立歴史館の信州学講座 1

古文書講座(上級 1)

6/ 2(土) 考古学講座②

6/ 3(日) 考古学セミナー

6/ 9(土) 県立歴史館の信州学講座 2

古文書講座(中級 A 1)

6/10(日) 古文書講座(初級 A 1)

6/14(木) 古文書講座(初級 B 1)

(中級 B 1)

6/16(土) 夏季企画展講演会

6/23(土) 県立歴史館の信州学講座 3

6/30(土) 考古学講座③

古文書講座(上級 2)

行事アルバム



秋季企画展関連講座

秋季企画展「進化する縄文土器」では、10月28日(土)に「パプア・ニューギニアの土器作りと縄文土器」と題し、早稲田大学教授高橋龍三郎氏による講演会を開催しました。現代の民族事例から、手作りの土器を誰が作り、どう進化(変化)し、周辺地域に広がっていくのかなどについて、興味深い話をうかがう機会になりました。



やさしい信濃の歴史講座in箕輪

11月25日(土)に、箕輪町地域交流センターで、「やさしい信濃の歴史講座in箕輪」を開催しました。当館の青木隆幸学芸部長が「伊那県と夜明け前」と題し、大竹憲昭総合情報課長が「発掘で何がわかるか?」と題した講座を行いました。用意した席がほとんど埋まり、非常に熱心にご聴講いただきました。



安曇野市豊科郷土博物館での展示解説

考古資料課では、平成29年巡回展に関わる講演会・講座・展示解説、そして考古学講座や遺跡探訪会などを実施しました。今年も参加される皆様からのご意見を参考に、講演会等の行事を実施いたします。皆様のご参加をお待ちしております。

表紙の写真の解説 弥生時代中期の主な展示遺物

【上 段】小壺と内部から出た炭化した粟粒

(長野遺跡群県町遺跡後町小学校地点、長野市教育委員会蔵)

【下段右端】瓢箪形をした壺(同上)

【下段中上】磨製石庖丁(篠ノ井遺跡群高速道地点、当館蔵)

【下段中下】特殊な形の無頸壺(森平遺跡、当館蔵)

【下段左端】漆塗りの縦櫛(松原遺跡高速道地点、当館蔵)



長野県立歴史館たより 春号 vol.94

2018(平成30)年3月1日発行

編集・発行 長野県立歴史館

〒387-0007 千曲市屋代260-6
電話 026-274-2000(代) FAX 026-274-3996
E-mail: rekishikan@pref.nagano.lg.jp
ホームページ: http://www.npmh.net/

印刷 奥山印刷工業株式会社